

# 長唄「鞆猿(うつぼざる)」のうた その1

猿曳き 名乗る

太郎 返事する

大名 太郎を呼ぶ

夫弓矢の始まりは 神代の時より用ひしとかや聞きつらん  
 矢入をうつぼと名付けしは 其中うつろにして 外に毛皮をかけたるは  
 栗の徳なぞに似たればとて 空穂とは言ひ伝ふ

はや新玉の春ぞ来る ぞめき囃せし花の中  
 花の中 花の筵に弾く三味線の 其の緋桜いとひなく  
 殿も家来もほのめく顔の よい緋桜の向鳥  
 土手の錦も花の空 竹屋くと呼ぶ舟に  
 乗り合わせたる猿廻し こなたの岸へ と着きにけり

太郎冠者あるか  
 ハア御前に候

大名「あれに背負うた一物を  
 いくくへ伴ふなるか尋ねて参り候へ」

と 仰せに冠者は心得て

太郎冠者「のうく猿曳き止まれとこそ」

其猿いくくへ曳き候や と言ひければ  
 賤の男ハアと手を仕えへ

猿 曳「やつがれは此のあたりに住む猿曳にて候」

太郎 猿曳きに声をかける

大名 猿曳きが背負った猿に興味をもつ

●春の情景●  
 春の風景の中  
 大名と家来、そして  
 猿曳きが登場!

●「うつぼ」について●  
 矢をいれる入れ物で、毛皮で飾ったり  
 したらしい……

# 長唄「鞆猿(うつぼざる)」のうた その2

猿曳き それならば自分の手で…許してくれ、こんなことになろうとは…

大名 じゃあ自分で猿を射ると…

猿曳き ピンチ!「お許しを」

太郎 猿の皮をほしがっている事を伝える

今日もお旦那廻りを致そうと存知まする。  
心急げばやつがれは、そろりくと参らうか

太郎冠者 「やれ待たうぞ猿曳き この方は隠れもない大名でおりやる」

今日は春野の遊びにて弓矢をかたげ 狩に参ったるが  
あれに持たせたる 鞆をなくく毛皮にしようと思ふ折からよい猿に逢うた  
其の猿の皮を申し受けたしと  
聞いて驚く猿曳きが 猿の皮をお好みとな  
そもやそも生きてゐる物の皮が 何とて上げらるるで御座らうぞ  
此の猿をもちまして 一と日くの命を送ります

猿曳 「これを上げましては翌より何の手業なし 是ばかりはお許し」

と詫びるに聴かぬ大名の  
威を張り詰めし強弓の一と矢に射てと立かかる

猿曳 「あア 申しお待ちなされて下さりませ」

猿の皮が御用ならば 御手を下し射殺されましたは皮に疵が付き、  
ここに猿の一打と申しまして 一打にて命の失る所が御座るによつて  
殺して進ぜましょう

太郎冠者も心得て 早うくと勧めけり  
また有るまじき殿の御意 畜類なれどもよう聴けよ  
子猿の時より飼育て 今更憂き目を見ることは  
不憫な事ぞ 今打つ程に 草端の蔭に ても恨みと思つてくるるなよ

太郎 早く早く!とせかす

★お気に入り★  
「こんにちも～おだんなまわりをいたしまそうと ぞんじます!」  
テンポのよい一節です♪

# 長唄「靱猿(うつぼざる)」のうた その3



大名 心動かされ、太郎にやめさせる

猿曳き 小猿の無心を訴える

あれ是非なしと振り上ぐる鞭の下  
廻る子猿のいじらしき

猿曳 「あれく、今のをご覧なされましたか

打殺さるる鞭とも知らいで 船漕ぐ真似を仕まするぞ」

／なに殺さるへと知らいで去をするとは不憫な事ぞ

大名 「やい太郎冠者 打つなと言へ 打つなと言へ」

／連れて帰れと申せよ

／と聞いて悦ぶ猿曳が ただ有難しと伏しをがみ

此の上の御札に 猿に一と舞まわせましようと 声を張り上げ

／ええい 猿が参って此方の御知行、まさる目出度き能つかまつる

猿は山王まさるめでたき目出度さよ 天より寶が降り下って

増生すれば 綾や千反の錦や千反 唐織物よ

地には黄金の花が咲き候 実に豊なる時なれや

／げに豊かなる時なれや

／されば我らは御暇と 元来し道へ

帰らんと花を見棄てて帰る雁 空も高根の富士筑波

名に負ふ岡田の春の夕 景色をここに止めけり

景色をここに止めけり

●お目出たい様子●  
最後はみんなで舞い、めでたしめでたし。

●注目！！●  
そんなこととも知らず  
猿は一生懸命芸をします